

地域安全マップの方法と効果

1. 地域安全マップとは

小宮（2005）は、子どもの被害防止能力を向上させる方法として、地域安全マップ作製を提唱している。地域安全マップとは、防犯環境設計(Crime Prevention Through Environmental Design: CPTED)と割れ窓理論(broken windows theory)に基づき、監視性と領域性の視点からコミュニティを点検し、「犯罪が起りやすい場所」と「犯罪が起りにくい場所」を地図に書き出すものである。地域安全マップ作製活動は、事前学習、フィールドワーク、マップ作製、発表会から構成されている。地域安全マップ作製において期待される効果としては、被害防止能力の向上、コミュニケーション能力の向上、地域への愛着心の向上、非行防止能力の向上、大人の防犯意識の向上がある（小宮，2006）。

2. 地域安全マップ作製指導の経緯

広島県では、2005年4月、子どもが被害者となる刑法犯認知件数の10%減少と、子どもの安全な環境づくり活動の拡充のため、地域安全マップの県内全域での作製、子どもの安全な環境づくりに取り組む地域活動者の育成・活動の定着を目指し、知事部局、教育委員会、警察本部が共同で、「子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム」を設置し、県を挙げて子どもの安全な環境づくりに集中的に取り組むこととなった。このプロジェクトチームは、2年間の期間限定で設置されたもので、現在では広島県環境県民局県民活動課地域安全グループに引き継がれている。

「子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム」は、地域安全マップ作製を広く県内に普及させるため、地域安全マップの開発者である立正大学文学部の小宮信夫教授をセミナー講師として、地域や学校でのマップ作製の指導者を養成するセミナーを行った。セミナーには、地域で子どもを見守る活動を行っている人や教職員など多くの人が参加し、小宮教授や研究室の学生の指導により、講義や実習を通して地域安全マップ作製のノウハウを学んだ。広島県では、広島県内の大学生を指導者として起用し、地域安全マップ作製セミナーを行う際に地元の大学生が参加し、フィールドワークやマップ作製などのグループ活動時に、グループリーダーとしてサポートできるようにした。2006年10月には、セミナーに学生ボランティアとして参加した学生が中心となり、大学生による地域安全マップ作製の支援を継続・定着させるためには、後継者の育成など大学の枠を超えた活動が必要であると考え、学生ボランティアのネットワーク組織“PACE（ペース）”を発足させ、地域・学校における地域安全マップ作製を支援している。

3. 小学校での地域安全マップ作製指導実施概要

福山大学犯罪心理学研究室で組織する、PACE 福山支部では、2005年の8月から福山市内外の小学校において地域安全マップ作製指導を継続して行っている。

PACE 福山支部に派遣要請があった場合、対象児童数に応じて派遣メンバーを募り、その中から毎回、各学校担当の代表となる学生を決め、その代表が以降の小学校との打ち合わせを行う。最初の打ち合わせは、資料の揃った福山大学で行うことが多く、準備物や1日の授

業で行う事例などを紹介して、当日のスケジュールについての話し合いを行う。その後、代表と数名の学生が小学校に下見に行き、フィールドワークで各班が回る地域の区割りを行い、小学校側と講義とマップづくりに使用する部屋や機材に関する打ち合わせをする。

地域安全マップ作製当日は、学生が開会式の30分前には小学校に到着し、小学校教員との最後の打ち合わせや講義の準備・確認を行う。地域安全マップ作製は、事前学習、フィールドワーク、マップ作り、発表会の順序で実施するが、当日の指導に関しては学生が進行を行い、小学校教員は安全確認や写真の印刷作業などを主に担当してもらう。事前学習では、代表が児童に対して地域安全マップとは何か、犯罪が起りやすい場所や起りにくい場所は、どのような場所なのかについてわかりやすく説明し、最後に確認のクイズを行う。フィールドワークでは、6人から8人で構成された班に、学生指導員が1名以上付き、表1のような役割分担をさせ、全員が何かの係をすることができるようにする。役割分担ができたら、班ごとに決められた地域を歩き、犯罪が起りやすい場所、起りにくい場所を探す。この時、児童自身が発見できるように、学生はヒントをだしたり、クイズ形式にしたりなど工夫をして児童の意見を引き出すようにする。フィールドワークから帰った班から、給食が始まるまでの時間に、マップ作りの説明を行う。この時、マップを作る時の役割分担やマップを作る際の約束や注意事項について話す。そして、給食時には、学生指導員と班の児童と一緒に給食を食べ、地域安全マップの話や学校の話などを行い、更なる信頼関係の構築を行う。給食をすませた後、実際にマップ作りを行うが、この時学生指導員は、助言や道具の運搬を行うのみであり、児童が作製しているマップにできるかぎり手をださないようにする。つまり、作製の主導権を学ぶ主体である子どもに委譲するのである。マップが完成したら、発表会を行うが、発表会では作製したマップについて話すのではなく、児童がマップ作りを行ってどのように感じたのかについて発表する。以上が1日の授業を利用しての方法であるが、午前中のみで実施する場合、休日に小学校や公民館を利用して実施する場合も多い。

表 1 地域安全マップ作製における役割分担（小宮，2007 を改変）

係	役割
班長	グループのみんなを導くリーダー。町歩きや地図書きのときに、みんなの行動や意見をまとめる役割をする。
副班長	班長の手助けをするサブリーダー。自動車や自転車が近づいてきたときに、班員に知らせて注意させる役割もする。
地図係	街歩きのとときに発見した危険な場所と安全な場所やインタビューした場所を、持ってきた地図に書き込む役割をする。
写真係	街歩きのとときに発見した危険な場所と安全な場所を写真に撮る役割をする。
インタビュー係	危険な場所と安全な場所を見つけるために、近所の人やお店の人からいろいろな話を聞き、メモをとる役割をする。
メモ係	街歩きのとときに発見した危険な場所と安全な場所の理由をメモする。

4. 地域安全マップの効果

平 (2007) は、地域安全マップ作りによる 4 つの効果について質問紙を用いて検討している。この研究では、小学 4 年生 30 名を対象に、地域安全マップ作製前後に質問調査を行うことによって、4 つの効果が得られるかどうかを検討している。質問紙は、被害防止能力の向上に関する質問を 2 項目、コミュニケーション能力の向上に関する質問を 3 項目、コミュニティへの愛着心の向上に関する質問を 8 項目、非行防止能力の向上に関する質問を 2 項目、合計 15 項目からなるものであった。回答方法は「すごくそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」の 4 件法であった。その結果、15 項目すべてにおいて望ましい方向へ向上していた。4 つの効果ごとの平均値では、4 つの効果すべてで有意に実施後の得点が高くなった($p<.01$)。この結果から、小宮 (2006) による推測の通り、4 つの効果が実際に向上していることが実証された。

引用文献

- 平 伸二 (2007) 地域安全マップの作製とその効果測定 福山大学こころの健康相談室 紀要 第 1 号
- 小宮信夫 (2005) 犯罪は「この場所」で起こる 光文社
- 小宮信夫 (2006) 改訂版地域安全マップ作製指導マニュアル [子ども] と [地域] を犯罪から守るために 東京都緊急治安対策本部 (安全・安心まちづくり担当)

詳細は下記の論文を参照して下さい。

平 伸二 (2007) 地域安全マップの作製とその効果測定 福山大学こころの健康相談室 紀要, 1, 35-42.

濱本有希・平 伸二 (2008) 大学生による小学生への地域安全マップ作製 指導とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, 2, 35-42.

三阪梨紗・濱本有希・平 伸二 (2009) 高校生を指導者とした地域安全マップ作製とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 97-105.